

# たけくらべ

樋口一葉

青空文庫



廻れば大門おほもんの見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝どぶに燈ともしび火びう  
 つる三階の騒さわぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来ゆききにはか  
 り知られぬ全盛をうらなひて、大音寺だいおんじまへ前まへと名は仏くさけれど、  
 さりとは陽氣の町と住みたる人の申まをき、三嶋神社みしまさまの角をまがりて  
 よりこれぞと見ゆる大厦いゑもなく、かたぶく軒端のきばの十軒長屋二十軒  
 長や、商あきひはかつつ利きかぬ処ところとて半なかさしたる雨戸の外ほかに、あや  
 しき形なりに紙を切りなして、胡粉ごふんぬりくり彩さい色しきのある田楽でんがくみるや  
 う、裏うらにはりたる串くしのさまをかき、一軒ならず二軒ならず、朝

日に干して夕日にしまふ手当ことごとしく、一家内これにかかりてそれは何ぞと問ふに、知らずや霜しもつきとり月酉の日例の神社に欲深よくふか様さまのかつきたま給ふこれぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりすつるよりかかりて、一年うち通しのそれは誠の商買人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着はるぎの支度もこれをば当てぞかし、南無なむや大鳥大明神おほとりだいめうじん、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等万倍の利益をと人ごとに言ふめれど、さりとは思ひのほかなるもの、このあたりに大長者のうわさも聞かざりき、住む人の多くは廓くるわもの者おつとにて良人は小格子こがうしの何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出たちいづれば、うしろに切火打きりびかくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎり

の側杖そばづえ無理情しんぢう死しのしそこね、恨みはかかる身のはて危あやふく、  
 すはと言はば命がけの勤めに遊山ゆざんらしく見ゆるもをかし、娘は大お  
 ほまがき 籬かきの下新造したしんぞとやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈かんぼんさ  
 げてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは檜ひ  
のきぶたい 舞台と見たつるもをかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの  
としま 年増、小ぎつぱりとせし唐とうざん棧せんぞろひに紺足袋こんたびはきて、雪駄せつたちや  
 らちやら忙がしげに横抱きの小包はとはでもしるし、茶屋が棧橋  
 とんと沙汰さたして、廻り遠とほや此処ここからあげます、誂あつらへ物の仕事ものや  
 さんとこのあたりには言ふぞかし、一体の風俗よそと変りて、女お  
なご 子の後うしろ帯おびきちんとせし人少なく、がらを好みて巾は広びろの巻帯、  
 年増はまだよし、十五六の小癩こしやくなるが酸漿ほうづきふくんでこの姿なりは

と目をふさぐ人もあるべし、所がら是非もなや、昨日河岸店きのふかしみせに何な

にむらさき

紫げんじなの源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉きちと手馴れぬ焼鳥の

夜店を出して、身代たたき骨になれば再び古巢への内儀姿かみさまがた、ど

こやら素しろうと人よりは見よげに覚えて、これに染まらぬ子供もなし、

秋は九月にわか仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとは宜よくも学びし露ろはち八

が物真似まがい、榮喜ゑいきが処作しよさ、孟子もうしの母やおどろかん上達の速すみやかさ、

うまいと褒ほめられて今宵こよひも一廻りと生意気は七つ八つよりつり

て、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそそり節、十五の少年がま

せかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちよんちよんと拍子を取りて、

運動会きに木きやり音頭もなしかねまじき風情ふぜい、さらでも教育はむづ

かしきに教師の苦心こころさこそと思はるる入谷いりやぢかくに育英舎とて、

私立なれども生徒の数は千人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも  
 教師が人望いよいよあらはれて、唯ただ学校と一ト口にてこのあたり  
 には呑込みのみこのつくほど成るがあり、通ふ子供の数々にあるひひ或は火消  
 びにんそく人足、おとつさんははねぼし芻橋の番屋に居るよと習はずして知る  
 その道のかしこき、梯子はしごのりのまねびにアレ忍びがへしを折りま  
 したと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の  
 父ととさんは馬だねへと言はれて、名のりや愁つらき子心にも顔あから  
 めるしほらしさ、出入りの貸座敷いゑの秘蔵息子寮りようずまゐ住居に華族さま  
 を気取りて、ふさ付き帽子面おももちゆたかに洋服かるがると花々し  
 きを、坊ちやん坊ちやんとてこの子の追つ従しするもをかし、多  
 くの中に龍華寺りうげじの信如しんによとて、千筋ちすぢとなづる黒髪も今いく歳とせのさ

かりにか、やがては墨染すみぞめにかへぬべき袖そでの色、発心ほっしんは腹からか、坊は親ゆづりの勉強べんきやうものあり、性来せいらいをとなしきを友達ともだちいぶせく思ひて、さまさまの悪戯いたづらをしかけ、猫の死骸しがいを縄なわにくくりてお役目やくめなれば引導いんどうをたのみますと投げつけし事も有りしが、それは昔、今は校内一の人とて仮あなごにも侮あなごりての処業しよごはなかりき、歳としは十五、並背なみぜいにていが栗の頭髮つむりも思ひなしか俗しやくとは変りて、藤ふぢもとのふゆきぢもとのふゆきよみよみ本信ほんしん如ごとと訓くにてすませど、何処どこやら釈しやくといひたげの素振そぶりなり。

## 二

八月二十日は千東せんぞく神社のまつりとして、山車屋台だしやたいに町々の見得



をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんづ勢ひ、若者が氣組  
 み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて由断のなりがたきこのあた  
 りのなれば、そろひの裕衣は言はでものこと、銘々に申合せて生  
 意気のありたけ、聞かば胆もつぶれぬべし、横町組と自らゆる  
 したる乱暴の子供大将に頭の長とて歳も十六、仁和賀の金棒に  
 親父の代理をつとめしより氣位ゑらく成りて、帯は腰の先に、返  
 事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、あれが頭の子で  
 なくばと鳶人足が女房の蔭口かげぐちに聞えぬ、心一ぱいに我がまま  
 を徹して身とほに合はぬ巾はばをも広げしが、表町おもてまちに田中屋の正太しょうた  
 郎らうとて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり身に愛敬あいけうあれば人  
 も憎くまぬ当の敵かたきあり、我れは私立の学校へ通ひしを、先方は公さき

立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしおる、去年も一昨年も  
 先方さきには大人の末社まつしやがつきて、まつりの趣向も我れよりは花を  
 咲かせ、喧嘩けんくわに手出しのなりがたき仕組みも有りき、今年又も  
 や負けにならば、誰れだと思ふ横町の長ちようきち吉だぞと平常つねの力だ  
 ては空からいばりとけなされて、弁天ぼりに水およぎの折も我が組に  
 成る人は多かるまじ、力を言はば我が方がつよけれど、田中屋が  
 柔おとなし和ぶりにごまかされて、一つは学問が出来おるを恐れ、我が  
 横町組の太郎吉たろきち、三五郎など、内々は彼方あちらがたに成たるも口惜くちをし、  
 まつりは明後日あさつて、いよいよ我が方かたが負け色と見えたらば、破れか  
 ぶれに暴れて暴れて、正太郎が面つらにきず一つ、我れも片眼片足なき  
 ものと思へば為しやすし、加担人かたうどは車屋の丑うしに元結もとゆひよりの文ぶん、手お

遊屋もちややの弥助やすけなどあらば引けは取るまじ、おおそれよりはあの人の事あの人の事、藤本のならば宜よき智恵も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば眼口にうるさき蚊を払ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそりと、信のぶさん居るかと言い顔を出しぬ。

己おれの為する事は乱暴だと人がいふ、乱暴かも知れないが口惜くやしい事は口惜しいや、なあ聞いとくれ信さん、去年も己おれが処すの末す弟あの奴こと正太郎組の短小野郎ちびやろうと万燈まんどうのたたき合ひから始まつて、それといふと奴この中間なかまがばらばらと飛出しやあがつて、どうだらう小さな者の万燈まんどうを打ぶちこわしちまつて、胴揚どうあげにしやがつて、見やがれ横町のぎまをと一人がいふと、間拔まぬに背のたかい大人のや

うな面をしてゐる団子屋の頓馬が、頭もあるものか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなんて悪口を言つたとき、己らあその時千束様へねり込んでゐたもんだから、あとで聞いた時に直様仕かへしに行かうと言つたら、親父さんに頭から小言を喰つてその時も泣寐入、一昨年はそらね、お前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、いくら金があるとつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、あんな奴を生して置くより擲きころす方が世間のためだ、己らあ今度のまつりにはどうしても乱暴に仕掛て取かへしを付けようと思ふよ、だから信

さん友達がひに、それはお前が嫌やだといふのも知れてるけれども何卒我れの肩を持つて、横町組の耻はぢをすすぐのだから、ね、おい、本家本元の唱歌だなんて威張りおる正太郎を取ちめてくれな  
いか、我れが私立の寐ぼけ生徒といはれればお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、助けると思つて大万燈おほまんどうを振廻しておくれ、己れは心から底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端たちばは無  
いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くても宜いよ。万燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。僕が這入ると負けるが宜いかへ。負けても宜いのさ、それは仕方が無いと諦めるから、お前は何も為しないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへくれると豪氣がうぎに人氣じんきがつくからね、

己れはこんな無学漢だのにお前は学が出来るからね、向ふの奴が漢語か何かで冷語でも言つたら、此方も漢語で仕かへしてくれ、ああ好い心持ださつぱりしたお前が承知をしてくれればもう千人力だ、信さん有がたうと常に無い優しき言葉も出るものなり。

一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帯といふ坊様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産声を揚げしものと大和尚夫婦が鼻負もあり、同じ学校へかよへば私立立とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若衆どもまで尻

押しをして、ひがみでは無し長吉が負けを取る事罪は田中屋がた  
 に少なからず、見かけて頼まれし義理としても嫌やとは言ひかね  
 て信如、それではお前の組に成るさ、成るといつたら嘘うそは無いが、  
 なるべく喧嘩は為せぬ方が勝だよ、いよいよ先方さきが売りに出たら仕  
 方が無い、何いざと言へば田中の正太郎位小指の先さと、我が力  
 の無いは忘れて、信如は机の引出しから京都みやげに貰もらひたる、  
 小鍛冶こかぢの小刀こがたなを取出して見すれば、よく利れそうだねへと覗のぞき  
 込む長吉が顔、あぶなし此物これを振廻してなる事か。

解かば足にもとどくべき毛髪を、根あがりに堅くつめて前髪大  
まげ  
 きく鬚おもたげの、赭熊しやくまといふ名は恐ろしけれど、此鬚をこの  
はやり  
 頃の流行とて良家の令嬢よきしゆ むすめごも遊ばさるるぞかし、色白に鼻筋と  
 ほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜くからず、一つ一つ  
 に取たてては美人の鑑かがみに遠けれど、物いふ声の細く清すずしき、人を  
 見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活いきいき々したるは快き物なり、  
てふとり  
 柿色に蝶鳥てふとりを染めたる大形の裕衣ゆかたきて、黒襦子くろじゆすと染分そめわけ絞り  
ちうやおび  
 の昼夜帯胸だかに、足にはぬり木履ぼくりここらあたりにも多くは見  
 かけぬ高きをはきて、朝湯の帰りに首筋白々と手拭てぬぐひさげたる立  
 姿を、今三年ののち後に見たしと廓くるわがへりの若者は申き、大黒屋だいこくやの  
みどり  
 美登利とて生国せうこくは紀州、言葉のいささか訛なまれるも可愛かわゆく、第一



は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重  
 きも道理、姉なる人が全盛の余波、延なごりひひいては遣手新造やりてしんぞが姉への世  
 辞にも、美いちやん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代てまりだい  
 と、くれるに恩を着せねば貰ふ身の有がたくも覚えず、まくはま  
 くは、同級の女生徒二十人に揃そろひのごむ鞠を与へしはおろかの事、  
 馴染なじみの筆やに店たなざらしの手遊てあそびを買しめて喜ばせし事もあり、さ  
 りとは日々夜々にちにちややの散財この歳としこの身分にて叶かなふべきにあらず、  
 末は何となる身ぞ、両親ありながら大目に見てあらしき詞ことばをかけた  
 る事も無く、楼あるじの主が大切がる様子さまも怪しきに、聞けば養女にも  
 あらず親戚しんせきにてはもとより無く、姉なる人が身売りの当時、鑑め  
 定きぎに來たりし楼の主が誘ひにまかせ、この地に活計たつきもとむとて親

子三人みたりが旅衣、たち出しいではこの訳、それより奥は何なれや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記に成りぬ、この身は遊芸手芸学校にも通はせられて、そのほかは心のまま、半日は姉の部屋、半日は町に遊んで見聞くは三味さみに太鼓にあけ紫のなり形、はじめ藤色絞りの半襟はんえりを袷あはせにかけて着て歩くきに、田舎者いなか者と町内の娘どもに笑はれしを口惜くやしがりて、三日三夜泣きつづけし事も有しが、今は我れより人々を嘲あざけりて、野暮な姿と打うちつけの悪にくまれ口を、言ひ返すものも無く成りぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面白い事をしてと友達ともだちのせがむに、趣向しゅきやうは何なりと各自めいめいに工夫して大勢の好い事が好いでは無いか、幾金いくくらでもいい私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、子

供中間の女王様によわうさま又とあるまじき恵みは大人よりも利きが早く、  
 茶番にしよう、何処どこのか店を借りて往來わうらいから見えるやうにして  
 と一人が言へば、馬鹿を言へ、それよりはお神輿みこしをこしらへてお  
 くれな、蒲田屋かばたやの奥に飾つてあるやうな本当のを、重くても構かまは  
 しない、やつちよいやつちよい訳なしだと振ねぢ鉢巻おとこをする男子の  
 そばから、それでは私たちがつまらない、皆みんなが騒さわぐを見るばかり  
 では美登利さんだとて面白くはあるまい、何でもお前の好い物に  
 おしよと、女の一むれは祭りを抜きに常盤座ときはずをと、言ひたげの口く  
ちぶり振をかし、田中の正太は可愛らしい眼をぐるぐると動かして、  
 幻燈にしないか、幻燈に、己れの処にも少しは有るし、足りない  
 のを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店で行やらうでは無いか、

己れが映し人<sup>て</sup>で横町の三五郎に口上を言はせよう、美登利さんそれにはしないかと言へば、ああそれは面白からう、三ちやんの口上ならば誰れも笑はずにはゐられまい、序<sup>ついで</sup>にあの顔がうつると猶<sup>なほ</sup>おもしろいと相談はととのひて、不足の品を正太が買物役、汗に成りて飛び廻るもをかしく、いよいよ明日<sup>あす</sup>と成りては横町までもその沙汰<sup>さた</sup>聞えぬ。

## 四

とり  
打つや鼓<sup>つづみ</sup>のしらべ、三味の音色<sup>ねいろ</sup>に事かかぬ場処も、祭り<sup>をのてる</sup>は別物、  
酉<sup>とり</sup>の市<sup>いち</sup>を除<sup>の</sup>けては一年一度の賑<sup>にぎは</sup>ひぞかし、三嶋<sup>みしま</sup>さま小野照<sup>をのてる</sup>さま、

お隣社ととなりづから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃ひは同じ  
 真岡木綿まおかに町名くづしを、去歳こそよりは好よからぬ形かたとつぶやくも有  
 りし、口なし染の麻だすきなるほど太きを好みて、十四五より以  
 下なるは、達磨だるま、木兔みみづく、犬はり子、さまざまの手遊を数多きほ  
 ど見得にして、七つ九つ十一つくるもあり、大鈴小鈴背中ながら  
 つかせて、駆け出す足袋たびはだしの勇ましく可笑をかし、群れを離れて  
 田中の正太が赤筋入りの印しるし半天ばんてん、色白の首筋に紺の腹がけ、  
 さりとは見なれぬ扮粧いでたちとおもふに、しごいて締めし帯の水浅みづあさ  
 黄ぎも、見よや縮緬ちりめんの上じょうぞめ染ゑり、襟の印のあがりも際きわ立たちて、  
 うしろ鉢巻だしきに山車だしの花一枝し、革緒かわをの雪駄せつたおとのみはすれど、馬  
 鹿なばやしの中間なかまには入らざりき、夜宮よみやは事なく過ぎて今日一日の

日も夕ぐれ、筆やが店に寄合しは十二人、一人かけたる美登利が  
 夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門へ出つ入りつして、呼  
 んで来い三五郎、お前はまだ大黒屋の寮へ行つた事があるまい、  
 庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、そ  
 れならば己れが呼んで来る、万燈は此処へあづけて行けば誰れも  
 蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむとあるに、吝嗇な奴め、  
 その手間で早く行けと我が年したに叱かられて、おつと来たさの  
 次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄天とはこれをや、あれあの  
 飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、  
 横ぶとりして背ひくく、頭の形は才槌とて首みぢかく、振むけ  
 ての面を見れば出額の獅子鼻、反歯の三五郎といふ仇名おもふ

べし、色は論なく黒きに感心なは目つき何処までもおどけて両の  
 頬ほに笑ゑくぼの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうな眉まゆのつき方も、  
 さりとはをかしく罪の無き子なり、貧なれや阿波あわちぢみの筒袖つつそで、  
 己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを  
 頭かしらに六人の子供を、養ふ親も轅かぢほう棒ぼうにすぎる身なり、五十軒によ  
 き得意場もちは持たりとも、内証うちしの車は商買かものの外なれば詮せんなく、  
 十三まけになれば片腕おとしと一昨年おとしより並木の活判か処ばんじよへも通ひしが、怠な  
 惰まけものなれば十日の辛棒つくばねつづかず、一ト月きと同じ職ぼも無くて霜しもつ  
 月きより春へかけては突羽根つくばねの内職、夏は検査場ぼの氷屋が手伝ひ  
 して、呼声をかしく客を引くに上手なれば、人には調法まがられぬ、  
 去年こぞは仁和賀の台引きいでに出しより、友達まんねんいやしがりて万年町てうの

呼名今に残れども、三五郎といへば滑稽者おどけものと承知して憎くむ者の無きも一徳なりし、田中屋は我が命の綱、親子が蒙かうむる御恩すくなからず、日歩とかや言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの金主様きんしゆさまあだには思ふべしや、三公己れが町へ遊びに来いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地処は龍華寺のもの、家主いゑぬしは長吉が親なれば、表むき彼方かなたに背く事かなはず、内々に此方こつちの用をたして、にらまるる時の役廻りつらし。正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれづれに忍ぶ恋路を小声にうたへば、あれ由断がならぬと内儀かみさまに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まぢくないの高声みななに皆も来いと呼つれて表へ駆け出す出合頭であいがしら、正太



は夕飯なげ喰べぬ、遊びに耄ほうけて先刻さつぎにから呼ぶをも知らぬか、  
 誰様どなたも又のちほど遊ばせて下され、これは御世話と筆やの妻にも  
 挨拶あいさつして、祖母ばばが自からの迎むかひに正太にんずいやが言はれず、そのま  
 ま連れて帰らるるあとは俄にはかに淋さびしく、人数にんずはさのみ変らねどあ  
 の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわぎもせねば串談じようだん  
 も三ちやんの様では無けれど、人好きのするは金持の息子さんに  
 珍めづらしい愛敬、何と御覧じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、  
 あれで年は六十四、白粉おしろいをつけぬがめつけ物なれど丸鬚まるまげの大  
 きさ、猫なで声して人の死ぬをも構かまはず、大方臨終おしまいは金と情しんじ  
 死うなさるやら、それでも此方こちどもの頭つむりの上らぬはあの物の御威  
 光、さりとは欲しや、廓内なかの大きい楼うちにも大分の貸付があるらし

う聞きましたと、大路に立ちて二三人の女房よその財産たからを数へぬ。

## 五

待つ身につらき夜半よはの置炬燵おきごたつ、それは恋ぞかし、吹風ふくかぜすず

しき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂に流して、身じまいの姿見、

母親が手づからそそけ髪つくろひて、我が子ながら美しくしきを立

ちて見、居て見、首筋が薄かつたと猶なほぞいひける、単衣ひとへは水色みづいろ

友仙ゆふせんの涼しげに、白茶しらちやきん金らんの丸帯少し幅の狭いへいを結ばせて、

庭石に下駄直すまで時は移りぬ。まだかまだかと堀へいの廻りを七度

び廻り、欠伸あくびの数も尽きて、払ふとすれど名物の蚊に首筋額かぶぎわ

したたかさげ螻、三五郎弱りきる時、美登利立出でていざと言ふに、  
 此方こなたは言葉もなく袖を捉とらへて駆け出せば、息がはづむ、胸が痛い、  
 そんなに急ぐならば此方こちは知らぬ、お前一人でお出いでと怒られて、  
 別れ別れの到着、筆やの店へ来し時は正太が夕飯の最中とおぼえ  
 し。ああ面白くない、おもしろくない、あの人が出来なければ幻燈  
 をはじめめるのも嫌、伯母さん此処ここの家に智慧の板は売りませぬか、  
 十六武蔵むさしでも何でもよい、手が暇で困ると美登利の淋しがれば、  
 それよと即坐はさみに鋏を借りて女子おなごづれは切抜きにかかる、男は三五  
 郎を中に仁和賀のさらひ、北ほくくわく廓全盛見わたせば、軒ちようちは提  
 燈ん電気燈、いつも賑にぎはふ五丁町、と諸声もろこゑをかしくはやし立つる  
 に、記憶おぼえのよければ去年一昨年とさかのぼりて、手振手拍子ひと

つも変る事なし、うかれ立たる十人あまりの騒ぎなれば何事と門かど  
 に立ちて人垣をつくりし中より、三五郎は居るか、一寸ちよつと来てく  
 れ大急ぎだと、文次ぶんじといふ元結もとゆひよりの呼ぶに、何の用意もなく  
 おいしよ、よし来たと身がるに敷居を飛こゆる時、この二夕またや股野  
 郎らう覚悟をしろ、横町の面つらよごしめ唯ただは置かぬ、誰れだと思ふ長吉  
 だなま生ふぎけた真似をして後悔するなと頬骨ほうぼね一撃うち、あつと魂消たまげて  
 逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をた  
 たき殺せ、正太を引出してやつてしまへ、弱虫にげるな、団子屋  
 の頓馬とんまも唯は置かぬと潮うしほのやうに沸かへる騒ぎ、筆屋が軒の掛提  
 燈は苦もなくたたき落されて、釣りらんぷ危なし店先の喧嘩なり  
 ませぬと女房わめが喚わめきも聞かばこそ、人数にんずは大凡おほよそ十四五人、ねぢ

鉢巻に大万燈ふりたてて、当るがままの乱暴狼藉らうぜき、土足に踏み込む傍若無人、目ざす敵かたきの正太が見えねば、何処へ隠くした、何処へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はさずに置く物かと三五郎を取こめて撃つやら蹴けるやら、美登利くやくしく止める人を搔かきのけて、これお前がたは三ちやんに何の咎とががある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隠くしもしない、正太さんは居ぬでは無いか、此処は私が遊び処、お前がたに指でもささしはせぬ、忽忽憎くらしい長吉め、三ちやんを何故なぜぶつ、あれ又引たほした、意趣があらば私をお撃ぶち、相手には私になる、伯母さん止めずに下されと身もだへして罵ののれば、何を女郎ほうげため頼たたたく、姉の跡つぎの乞食め、手前てめへの相手にはこれが

相応だと多人数のうしろより長吉、泥草履つかんで投つけければ、  
 ねらひ違はず美登利が額際にむさき物したたか、血相かへて立あ  
 がるを、怪我でもしてはと抱きとむる女房、ざまを見る、此方に  
 は龍華寺の藤本がついてゐるぞ、仕かへしには何時でも来い、薄  
 馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬけの活地なしめ、帰りには待伏せする、  
 横町の闇に気をつけろと三五郎を土間に投出せば、折から靴音た  
 れやらが交番への注進今ぞしる、それと長吉声をかくれば丑松  
 文次その余の十余人、方角をかへてばらばらと逃足はやく、抜け  
 裏の露路にかがむも有るべし、口惜しいくやしい口惜しい口惜し  
 い、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも  
 三五郎だ唯死ぬものか、幽ゆうれいになつても取殺すぞ、覚えてゐろ

長吉めと湯玉のやうな涙はらはら、はては大声にわつと泣き出す、  
 身内や痛からん筒袖の処々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止め  
 るにも止めかねて勢ひの凄まじさに唯おどおどと気を吞まれし、  
 筆やの女房走り寄りて抱きおこし、背中をなで砂を払ひ、堪忍  
 をし、堪忍をし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者ば  
 かり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れてゐる、それで  
 も怪我のないは仕合、この上は途中の待ぶせが危ない、幸ひの  
 巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、この通りの子細で御  
 座ります故と筋をあらあら折からの巡査に語れば、職掌がらいざ  
 送らんと手を取らるるに、いゝいゝ送つて下さらずとも帰ります、  
 一人で帰りますと小さく成るに、こりや怕い事は無い、其方の家

まで送る分の事、心配するなど微笑を含んで頭を撫でらるるに弥よいよ々ちぢみて、喧嘩をしたと言ふと親父とつさんに叱かられます、頭かしらの家は大屋さんで御座りますからとて凋しほれるをすかして、さらば門かどぐち口まで送つて遣やる、叱からるるやうの事は為せぬわとて連れらるるに四隣あたりの人胸を撫でてはるかに見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振はなして一目散に逃げぬ。

## 六

めづらしい事、この炎天に雪が降りはせぬか、美登利が学校を嫌やがるはよくよくの不機嫌、朝飯がすすまずば後のちかた刻やすけに鮎あゆでも



誂へようか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見え  
 る、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免こふむれと  
 ありしに、いゑいゑ姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけ  
 たのなれば、参らねば気が済まぬ、お賽銭下され行つて来ます  
 と家を駆け出して、中田圃の稲荷に鰐口ならして手を合せ、  
 願ひは何ぞ行きも帰りも首うなだれて畦道づたひ帰り来る美登  
 利が姿、それと見て遠くより声をかけ、正太はかけ寄りて袂を押  
 へ、美登利さん昨夕は御免よと突然にあやまれば、何もお前に  
 謝罪られる事は無い。それでも己れが憎くまれて、己れが喧嘩  
 の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ来なければ帰りはしない、  
 そんなに無暗に三五郎をも撃たしはしなかつた物を、今朝三五郎

の処へ見に行つたら、彼奴あいつも泣いて口惜くやしがつた、己れは聞いてさへ口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふでは無いか、あの野郎乱暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍しておくれよ、己れは知りながら逃げてゐたのでは無い、飯を掻か込んで表へ出やうとするとお祖母さんが湯に行くといふ、留守居をしてゐるうちの騒ぎだらう、本ほん当とに知らなかつたのだからねと、我が罪のやうに平あやまりに謝あやまつ罪つて、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何負傷けがをするほどでは無い、それだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけな  
いよ、もし万ひよつと一つお母つかさんが聞きでもすると私が叱ちかれるから、親つむりでさへ頭むりに手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額ぬらにぬら

れては踏まれたも同じだからとて、背ける顔のいとをしく、本當  
 に堪忍しておくれ、みんな己れが悪るい、だから謝る、機嫌を直  
 してくれないか、お前に怒られると己れが困るものと話しつれ  
 て、いつしか我家の裏近く来れば、寄らないか美登利さん、誰れ  
 も居はしない、祖母おばあさんも日がけを集めに出たらうし、己ればか  
 りで淋しくてならない、いつか話した錦にしきゑ絵を見せるからお寄り  
 な、種いろいろ々々があるからと袖そでを捉らへて離れぬに、美登利は無言  
 にうなづいて、佗わびた折戸の庭口より入れば、広からねども鉢も  
 のをかしく並びて、軒につり忍艸しのぶ、これは正太うまが午の日の買物と  
 見えぬ、理由わけしらぬ人は小首やかたぶけん町内一の財産家ものもちといふ  
 に、家内は祖母おばと此子これ二人、万よろづの鍵かぎに下腹冷えて留守は見渡しの

総長屋、さすがに錠前くたくもあらざりき、正太は先へあがりて  
 風入りのよき場処ところを見たてて、此処へ来ぬかと団扇うちわの気あつかひ、  
 十三の子供にはませ過ぎてをかし。古くより持ったへし錦絵かず  
 かず取とり出いだし、褒めらるるを嬉しく美登利さん昔しの羽子板を見  
 せよう、これは己れの母かかさんがお邸やしきに奉公してゐる頃いただいた  
 のだとき、をかしいでは無いかこの大きい事、人の顔も今のは  
 違ふね、ああこの母さんが生きてゐると宜いが、己れが三つの歳とし  
 死んで、お父とつさんは在るけれど田舎の実家へ歸つてしまつたから  
 今は祖母おばあさんばかりさ、お前は浦山うらやましいねと無端そぞろに親の事を言  
 ひ出せば、それ絵がぬれる、男が泣く物では無いと美登利に言は  
 れて、己れは気が弱いのかしら、時々種々いろいろの事を思ひ出すよ、

まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町たまちあたりを集めに  
 廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何さむい位で泣きは  
 しない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、ああ一昨おととし  
 年から己れも日がけの集めに廻るさ、祖母さんは年寄りだからそ  
 のうちにも夜るは危ないし、目が悪るいから印いんげう形を押たり何か  
 に不自由だからね、今まで幾いくたり人も男を使つたけれど、老人としよりに  
 子供だから馬鹿にして思ふやうには動いてくれぬと祖母さんが言  
 つてゐたつけ、己れがもう少し大人に成ると質屋を出さして、昔  
 しの通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみにしてゐるよ、  
 他処よその人は祖母さんを吝けちだと言ふけれど、己れの為に儉約つましくして  
 くれるのだから気の毒でならない、集金あつめに行くうちでも通新とほりしんま

町ちや何かに随分可愛かわい想さうなのがあるから、さぞお祖母おばあさんを悪くいふだらう、それを考へると己れは涙がこぼれる、やつぱり気が弱いのだね、今朝も三公さんこうの家うちへ取りに行つたら、奴やつめ身体からだが痛い癖くせに親父おやに知らすまいとして働いてゐた、それを見たら己れは口が利けなかつた、男が泣くてへのは可笑をかしいでは無いか、だから横町の野蕃じやがたら漢かんに馬鹿ばかにされるのだと言ひかけて我が弱いを耻はづかしさうな顔かほ色いろ、何心なく美登利みとうりと見合す目つきの可愛かわいさ。

お前の祭まつりの姿なりは大層おほよく似合つて浦山うらやましかつた、私も男だとあんな風ふうがして見たい、誰れのよりも宜よろく見えたと賞ほめられて、何だ己おれれなんぞ、お前まへこそ美うくしいや、廓な内かの大おほ巻まきさんよりも奇麗きれいだと皆みんながいふよ、お前まへが姉あねであつたら己おれれはどんなに肩身かたみが広ひろか

ろう、何処へゆくにも追従て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねへ美登利さん今度一処に写真を取らないか、我れは祭りの時の姿で、お前は透綾のあら縞で意気な形をして、水道尻の加藤でうつさう、龍華寺の奴が浦山しがるやうに、本当だぜ彼奴はきつと怒るよ、真青に成つて怒るよ、に急肝だからね、赤くはならない、それとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は嫌やかへ、嫌やのやうな顔だものと恨めるもをかしく、変な顔にうつるとお前に嫌らはれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。

朝冷はいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩に

よ、私の寮へも遊びにお出でな、燈籠とうろうながして、お魚追ひましまよ、池の橋が直つたれば怕こわい事は無いと言ひ捨てに立たち出る美登利の姿、正太うれしげに見送つて美しくと思ひぬ。

## 七

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら学校は育英舎なり、去りし四月の末つかた、桜は散りて青葉のかげに藤の花見といふ頃、春季の大運動会とて水みづの谷やの原にせし事ありしが、つな引、鞠まりなげ、縄とびの遊びに興をそへて長き日の暮るるを忘れし、その折の事とや、信如いかにしたるか平常へいぜいの沈おち着つきに似ず、池のほ



とりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も  
 泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅  
 の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしけ  
 るに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と  
 話をして、嬉しさに礼を言つたは可笑しいでは無いか、大方美  
 登利さんは藤本の女房になるのであらう、お寺の女房なら大黒  
 さまと言ふのだなどと取沙汰しける、信如元来かかる事を人の上  
 に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として  
 我慢のなるべきや、それよりは美登利といふ名を聞くごとに恐ろ  
 しく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もやくやして、何とも言は  
 れぬ厭やな氣持なり、さりながら事ごとに怒りつける訳にもゆか

ねば、なるだけは知らぬ<sup>てい</sup>躰をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣<sup>や</sup>り過ぎる心なれど、さし向ひて物などを問はれたる時の当惑さ、大方は知りませぬの一ト言にて済ませど、苦しき汗の身うちに流れて心ぼそき思ひなり、美登利はさる事も心にとまらねば、最初<sup>はじめ</sup>は藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、学校退<sup>ひ</sup>けての歸りがけに、我れは一足はやくて道端<sup>みちづ</sup>に珍<sup>めづ</sup>らしき花などを見つければ、おくれし信如を待合して、これこんなうつくしい花が咲てあるに、枝が高く<sup>わたし</sup>て私には折れぬ、信<sup>のぶ</sup>さんは背<sup>せい</sup>が高ければお手が届きましょ、後生折つて下されと一むれの中にては年<sup>とし</sup>長<sup>かさ</sup>なるを見かけて頼めば、さすがに信如袖ふり切り<sup>ゆき</sup>て行<sup>ゆ</sup>すぎる事もならず、さりとて人の思はくいよいよ愁<sup>つ</sup>らければ、手近の枝を引寄せ

て好悪かまはず申訳ばかりに折りて、投つけるやうにすたすた  
 と行過ぎるを、さりとは愛敬の無き人と惘れし事も有しが、度  
 かさなりての末には自ら故意の意地悪のやうに思はれて、人には  
 さもなきに我れにばかり愁らき処為をみせ、物を問へば碌な返事  
 した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしを為れば怒る、陰気らし  
 い気をつまる、どうして好いやら機嫌の取りやうも無い、あのや  
 うなむづかしやは思ひのままに捻れて怒つて意地わるが為たいな  
 らんに、友達と思はずは口を利くも入らぬ事と美登利少し疝にさ  
 はりて、用の無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひ  
 たりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中に大川  
 一つ横たはりて、舟も筏も此処には御法度、岸に添ふておもひお

もひの道があるきぬ。

祭りは昨日きのふに過ぎてそのあくる日より美登利の学校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く額の泥の洗ふても消えがたき耻ちぢよく辱ぢよくを、身にしみて口惜くやしければぞかし、表町とて横町とて同じ教場におし並べば朋輩ほうばいに变りは無き筈を、をかしき分け隔てに常日頃意地を持ち、我れは女の、とても敵かなひがたき弱味をば付目にして、まつりの夜の処しうち為はいかなる卑怯ひきやうぞや、長吉のわからずやは誰たれも知る乱暴の上なしなれど、信如の尻おし無くはあれほどに思ひ切りて表町をば暴あらし得じ、人前をば物識ものしりらしく温順すなほにつくりて、陰に廻りて機関からくりの糸を引しは藤本の仕業に極きわまりぬ、よし級は上にせよ、学ものは出来るにせよ、龍華寺さまの若旦わかだん

那なにせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬ物を、

あのやうに乞食呼よばはりして貰もらふ恩は無し、龍華寺はどれほど立派

な檀家だんかありと知らねど、我が姉あねさま三年の馴染なじみに銀行の川様、兜か

ぶとてう

町よねの米様もあり、議員の短小ちいさま根曳ねびきして奥さまにと仰せら

れしを、心意気に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、

あの方とても世には名高きお人と遣手衆やりてしゆの言はれし、嘘うそならば

聞いて見よ、大黒やに大巻の居ずはあの楼いゑは闇やみとかや、さればお

店みせの旦那とととても父かかさん母かかさん我が身をも粗そりやく畧りやくには遊ばさず、常

々大切がりて床の間にお据へなされし瀬戸物の大黒様をば、我れ

いつぞや坐敷の中にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並びし花はない

瓶けを仆たほし、散々に破損けがをさせしに、旦那次ごしゆの間に御酒めし上り

ながら、美登利お転婆が過ぎるのと言はれしばかり小言は無かり  
 き、他の人ならば一通りの怒りでは有るまじと、女子衆達をんなしゆにあ  
 とあとまで羨うらやまれしも必ひつきやう竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住  
 居まいに人の留守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情ふせいに負ひけ  
 を取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいちめられんは心外  
 と、これより学校へ通ふ事おもしろからず、我ままの本性あなど  
 られしが口惜しさに、石筆せきひつを折り墨をすて、書物ほんも十露盤そろばんも入  
 らぬ物にして、中なかよき友と埒らちも無く遊びぬ。

## 八

走れ飛ばせの夕べに引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の  
 淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて  
 頬かぶり、彼女が別れに名残の一撃、いたさ身にしみて思ひ出  
 すほど嬉しく、うす気味わるやにたにたの笑ひ顔、坂本へ出ては  
 用心し給へ千住がへりの青物車にお足元あぶなし、三嶋様  
 の角までは気違ひ街道、御顔のしまり何れも緩るみて、はばか  
 りながら御鼻の下ながながと見えさせ給へば、そんじよ其処ら  
 にそれ大した御男子様とて、分厘の価値も無しと、辻に立ちて  
 御慮外を申もありけり。楊家の娘君寵をうけてと長恨歌を  
 引出すまでもなく、娘の子は何処にも貴重がらるる頃なれど、  
 このあたりの裏屋より赫奕姫の生るる事その例多し、築地の某

屋れやに今は根を移して御前さま方の御相手おん、踊りに妙を得し雪とい  
 ふ美形びけい、唯今のお座敷にてお米のなります木はと至極あどけなき  
 事は申とも、もとは此町ここの巻帯党まきおびづれにて花がるたの内職せしもの  
 なり、評判はその頃に高く去るもの日々に疎うとければ、名物一つか  
 げを消して二度目の花は紺屋こうやの乙おとむすめ娘、今千束町せんぞくまちに新つた屋  
 の御神燈ほのめかして、小吉こきちと呼ばれるる公園の尤物まれものも根生ねおひは  
 同じ此処ここの土成し、あけくれの噂うはさにも御出世といふは女に限りて、  
 男は塵塚ちりづかさがす黒斑くろぶちの尾の、ありて用なき物とも見ゆべし、  
 この界限かいがいに若い衆しゅと呼ばれるる町並の息子、生意気ざかりの十七  
 八より五人組七人組、腰に尺八の伊達だてはなけれど、何とやらいか厳め  
 しき名の親分が手下てかにつきて、揃そろひの手ぬぐひ長提燈ながでうちん、賽さいころ



振る事おぼえぬうちは素見ひやかしの格子かうしき先に思ひ切つての串談じようだん

も言ひがたしとや、真面目につとむる我が家業は昼のうちばかり、

一風呂浴びて日の暮れゆけば突つきかけ下駄つぎに七五三の着物、何屋の

店の新妓しんこを見たか、金杉かなすぎの糸屋いとやが娘むすめに似てもう一倍鼻はながひくい

と、頭脳あたまの中をこんな事にこしらへて、一軒いっけんごとの格子かうしきに烟草たばこの

無理無理どり鼻紙はなしの無心むしん、打ちつ打たれつこれを一世せの誉ほまれと心得こころえれば、

堅気けんきの家の相続あひつぎ息子むすこ地廻じまわりと改名かへなして、大門おほもんぎわ際に喧嘩けんくわかひと

出るでるもありけり、見みよや女子おんなの勢いきほひ力ちからと言いはぬばかり、春秋はるあきし

らぬ五丁町ごていまちの賑にぎはひ、送おくりの提燈かんぼんいま流行はやらねど、茶屋ちやが廻女まわしの

雪駄せつたのおとに響こたき通とほへる歌舞おんぎよく音ね曲まが、うかれうかれて入いりこ込こむ人

の何を目当こことと言問ことはば、赤あか糸いとり赭熊しやくまに裯うちかけ襠すその裾すそながく、につ

と笑ふ口元目もと、何処どこが美よいとも申がたけれど華魁衆おいらんしゅとて此  
 処こゝにての敬うやまつひ、立たはなれては知るによしなし、かかる中なかにて朝あさ  
 夕ふを過すごせば、衣きぬの白地しらぢの紅べにに染しむ事無理ならず、美登利みとうりの眼  
 の中に男おとこといふ者ものさつても怕こわからず恐おそろしからず、女郎ぢやうらうといふ者  
 さのみ賤いやしき勤いそめとも思おもはねば、過すぎし故郷こきやうを 出しゅつ 立たつの当時たうじな  
 いて姉あねをば送りしこと夢ゆめのやうに思おもはれて、今日けふこの頃ころの全盛ぜんせいに  
 父母ふぼへの孝養かうやううらやましく、お職とほを徹とほす姉あねが身みの、憂ういの愁しゅうらい  
 の数かずも知らねば、まぢ人恋ねづみふる鼠ねづみなき格子かぢの咒じゆもん文もん、別わかれの背せ中な  
 に手加減てかぢの秘密ひそくまで、唯ただおもしろく聞きなされて、廓くわくことばを町まちに  
 いふまで去いりとは耻はづかしからず思おもへるも哀あはれなり、年としはやうやう数かず  
 への十四じゅうし、人形にんぎやう抱かかいて頬ほずりする心こゝろは御華族おんわらうのお姫様ひめさまとて変かりな

けれど、修身の講義、家政学のいくたても学びしは学校にてばかり、誠あけくれ耳に入りしは好いた好かぬの客の風説うはさ、仕着せ積み夜具茶屋への行わたりゆき、派手は美事に、かなはぬは見すばらしく、人事我事分別をいふはまだ早し、幼な心に目の前の花のみはしるく、持まへの負けじ気性は勝手に馳はせ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、寐ねぼれ道、朝がへりの殿がた一順すみて朝寐の町も門かどの箒ははきめ目青海波せいがいはをゑがき、打水よきほどに濟みし表町の通りを見渡せば、来るは来るは、万年町山伏町、新し谷町あたあたりを疇ねぐらにして、一能一術これも芸人の名はのがれぬ、よかよか飴あめや軽業師、人形つかひ大神楽だいかぐら、住吉すみよしをどりに角兵衛べいじし獅子、おもひおもひの扮粧いでたちして、縮緬透綾ちりめんすきやの伊達もあれば、

薩摩さつまがすりの洗せんひ着ぎに黒襦子くろじゆすの幅狭帯はばせまおび、よき女おんなもあり男おとこもあり、五人七人十人一組の大おほいたむろもあれば、一人淋さびしき瘦やせ老爺おやぢの破やれ三味線ざみせんかかへて行くもあり、六つ五つなる女おんなの子こに赤あかくだす襷たすきさせて、あれは紀きの国くにおどらするも見みゆ、お顧客とくいは廓内かくないに居いつづけ客きやくのなぐさみ、女郎ぢやうらうの憂うれさ晴はらし、彼か処しこに入る身みの生涯せうがいやめられぬ得え分ぶんありと知られて、来るも来るも此こゝ処ところらの町まちに細こかかしき貫もらひを心こゝろに止とめず、裾すそに海草みづくのいかがはしき乞食こじきさへ門かどには立たたず行ゆき過すぎるぞかし、容きりよう貌ようよき女おんな太夫ただうの笠かさにかくれぬ床ゆかしの頬ほを見みせながら、喉のど自慢じまん、腕うで自慢じまん、あれあの声こゑをこの町まちには聞きかせぬが憎にくくしと筆ふでやの女房にようばう舌したうちして言いへば、店みせ先に腰こしをかかけて往ゆき来きを眺ながめし湯ゆがへりの美登利みとるい、はらりと下くだる前髪まへかみの毛けを黄つ

楊げのびんぐし 櫛しにちやつと搔かきあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで  
 来ませうとて、はたはた駆けよつて袂たもとにすぎり、投げ入れし一品しな  
 を誰たれにも笑つて告げざりしが好みの明あけがらす 鳥すさらりと唄はせて、  
 又ごひいき御おん鼻負きをの嬌きやうおん 音おんこれたやすくは買ひがたし、あれが子供の  
しわざ処業かと寄集りし人舌を巻いて太夫よりは美登利の顔を眺めぬ、  
 伊達には通るほどの芸人を此処にせき止めて、三味さみの音ね、笛の音、  
 太鼓の音、うたはせて舞はせて人の為せぬ事して見たいと折ふし正  
 太ささやに唄あきいて聞かせれば、驚おいて呆いれて己おらは嫌やだな。

## 九

によげがもん、に仏説阿弥陀經、ぶつせつあみだけう、くわ声は松風に和して心のちりも吹払は  
 如是我聞、おんてらさま、なまうを生魚あぶる烟けふなびきて、らんたうば卵塔場に  
 るべき御寺様の庫裏より、むつき嬰子の襁褓ほしたるなど、お宗旨によりて構かまひなき事なれども、  
なまぐさ法師を木のはしと心得たる目よりは、そぞろに腥く覚ゆるぞかし、  
だいおしょう龍華寺の大和尚身代と共に肥へ太りたる腹なり如何いかにも美事に、  
よ色つやの好きこと如何なる賞ほめ言葉を参らせたればよかるべき、  
ひもも桜色にもあらず、緋桃の花でもなし、そ剃りたてたる頭つむりより顔より  
あかがねいろ首筋にいたるまで銅色あかがねいろの照りに一点のにごりも無く、しらが白髪も  
まゆまじる太き眉をあげて心まかせの大笑ひなさるる時は、本堂の如に  
よらい来よらいさま驚きて台座よりまろ転おちたまび落給はんかと危ぶまるるやうなり、  
ごしんぞ御新造はいまだ四十の上を幾らも越さで、色白に髪の毛薄く、丸ま

鬚るまげも小さく結ひて見ぐるしからぬまでの人がら、参詣人さんけいにんへも  
 愛想よく門前の花屋が口悪る鼻かかもとかくの蔭かげぐち口を言はぬを見れ  
 ば、着ふるしの裕衣ゆかた、総菜そうざいのお残りなどおのづからの御恩かうむも蒙  
 るなるべし、もとは檀家だんかの一人成しが早くに良人おつとを失なひて寄る  
 辺なき身の暫時しばらくここにお針やとひ同様、口さへ濡ぬらせて下さ  
 らばとて洗ひ濯そそぎよりはじめてお菜ごしらへは素もとよりの事、墓場  
 の掃除に男衆おとこしゆの手を助くるまで働けば、和尚さま経済より割  
 出でしての御不憫ごふびんかかり、年は二十から違ちがうて見ともなき事は女も  
 心得ながら、行き処ゆどころなき身なれば結句よき死場処と人目を耻ぢぬ  
 やうに成りけり、にがにがしき事なれども女の心だて悪るからね  
 ば檀家の者もさのみは咎とがめず、総領の花といふを懐胎もうけし頃、檀家

の中にも世話好きの名ある坂本の油屋が隠居さま仲人なかうどといふも  
 異なる物なれど進めたてて表向きのものにしける、信如もこの人の  
 腹より生れて男女なんによ二人の同胞きようだい、一人は如法によほうの変屈ものに  
 て一日部屋の中にまぢまぢと陰気らしき生むまれなれど、姉のお花は  
 皮薄かわうすの二重腮にぢうあごかわゆらしく出来たる子なれば、美人といふに  
 はあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人しろうとにして捨てて置  
 くは惜しい物の中に加へぬ、さりとてお寺の娘ひだに左づまり棲しやか、お釈迦しやか  
 が三味しやみひく世は知らず人の聞え少しは憚はばかられて、田町たまちの通りこに  
 葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうちにこの娘こを据へて  
 愛敬を売らすれば、秤はかりの目はとにかく勘定しらずの若い者など、  
 何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかけ絶えた



る事なし、いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、  
 法用のあれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳面くるやら経  
 よむやらかくては身躰からだのつづき難しと夕暮れの椽ゑんさき先に花むしろ  
 を敷かせ、片肌ぬぎに団扇うちわづかひしながら 大 盃おほさかづきに泡盛あわもりをな  
 みなみと注つがせて、さかなは好物の蒲焼かばやきを表町のむさし屋へあ  
 らい処あつちをとの詠へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、その嫌  
 やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの  
 筆やに子供づれの声を聞けば我が事を誹そしらるるかと情なく、そし  
 らぬ顔に鰻屋うなぎやの門かどを過ぎては四辺あたりに人目の隙すきをうかがひ、立戻  
 つて駈け入る時の心地、我身限なまぐさつて腥きものは食べまじと思ひぬ。  
 父てておや親和尚は何処どこまでもさばけたる人にて、少しは欲深の名に

たてども人の風説うはさに耳をかたぶけるやうな小胆にては無く、手の  
 暇あらば熊手の内職もして見やうといふ氣風なれば、霜月の西とりに  
 は論なく門前の明地あきちに簪かんざしの店を開き、御新造に手拭ひかぶらせて  
 縁喜いの宜いのをと呼ばせる趣向、はじめは耻かしき事に思ひけれ  
 ど、軒ならび素人の手業てわざにて莫大ばくだいの儲けもうと聞くに、この雑踏の  
 中といひ誰たれも思ひ寄らぬ事なれば日暮れよりは目にも立つまじ  
 と思案して、昼間は花屋の女房に手伝はせ、夜に入りては自身みづから  
 をり立て呼たつるに、欲なれやいつしか耻かしさも失せて、思は  
 ず声こゑだかに負ましよ負ましよと跡を追ふやうに成りぬ、人波にも  
 まれて買手も眼まなこの眩くらみし折なれば、現在後世ごせねがひおとつひに一昨日来た  
 りし門前も忘れて、簪三本七十五錢と懸直かけねすれば、五本ついたを

三錢ならばと直切ねぎつて行く、世はぬば玉の闇やみの儲もうけはこのほかにも有るべし、信如はかかる事どもいかに心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近辺の人々が思わく、子供仲間の噂にも龍華寺では簪かんざしの店を出して、信さんが母かかさんの狂気きちがひづら面めんして売つてゐたなどと言はれもするやと耻かしく、そんな事はよしにしたが宜う御坐りませうと止めし事もありしが、大和尚大笑ひに笑ひすてて、黙つてゐろ、黙つてゐろ、貴様などが知らぬ事だわとて丸々相手にしてはくれず、朝念仏に夕勘定、そろばん手にしてにこにこと遊ばさるる顔つきは我親ながら浅ましくして、何故その頭つむりをまるめ給ひしぞと恨めしくもなりぬ。

もとより一腹ぶく一对つゐの中に育ちて他人交ぜずの穏かなる家の内な

れば、さしてこの児こを陰気ものに仕立あげる種は無けれども、性  
 来おとなしき上に我が言ふ事の用ひられねばとかくに物のおもし  
 ろからず、父が仕業も母の所作も姉の教育したても、悉しつかい皆あやまりの  
 やうに思はるれど言ふて聞かれぬものぞと諦あきらめればうら悲しきや  
 うに情なく、友朋ほうばい輩は変屈者の意地わると目ざせども自ら沈おのづかみ  
 るる心の底の弱き事、我が蔭口を露ばかりもいふ者ありと聞けば、  
 立出たちいでて喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にとち籠こもつて人に面おもての合は  
 されぬ臆おくびやう病至極の身なりけるを、学校にての出来ぶりといひ  
 身分がらの卑いやしからぬにつけて然さる弱虫とは知る者なく、龍華寺  
 の藤本は生煮えの餅のやうに真しんがあつて気になる奴と憎がるもの  
 も有ありけらし。

## 十

祭りの夜は田町の姉のもとへ使を吩いひつけ附られて、更ふくるまで我  
 家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、翌あす日になりて  
 丑松文次その外の口よりこれこれであつたと伝へらるるに、今更  
 ながら長吉の乱暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮せん  
 なく、我が名を仮りられしばかりつくづく迷惑に思われて、我が  
 為なしたる事ならねど人々への氣の毒を身一つに脊負せおひたるやうの思  
 ひありき長吉も少しは我が遣やりそこねを耻はづかしう思ふかして、信  
 如あに逢はば小言や聞かんとその三四日は姿も見せず、やや余ほとぼり炎

のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いてくんな、誰れもお前正太が明巢あきすとは知るまいでは無いか、何も女郎めらうの一疋位びき相手にして三五郎を擲なぐりたい事も無かつたけれど、万燈まんどうを振込んで見りやあ唯ただも帰れない、ほんの附景気につまらない事をしてのけた、そりやあ己れが何処までも悪るいさ、お前の命いひつけ令を聞かなかつたは悪るからうけれど、今怒られては法かたなしだ、お前といふ後だてが有るので己らあ大舟に乗つたやうだに、見すてられちまつては困るだらうじや無いか、嫌やだとつてもこの組の大將で居てくんねへ、さうどちばかりは組まないからとて面目なささうに謝罪わびられて見ればそれでも私わたしは嫌やだとも言ひがたく、仕方が無い遣る処までやるさ、弱い者い

ぢめは此方こつちの耻になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に末社がついたらその時のこと、決して此方こつちから手出しをしてはならないと留とどめて、さのみは長吉をも叱しかり飛ばさねど再び喧嘩けんくわのなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲たかれて蹴けられてその二三日は立居も苦しく、夕ぐれ毎ごとに父てておや親が空からぐるま車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公はどうかしたか、ひどく弱つているやうだなと見知りの台屋に咎められしほど成しが、父親はお辞義の鉄てつとして目上の人に頭つむりをあげた事なく廓内なかの旦那は言はずとももの事、大屋様地主様いづれの御無理も御ごもつとも尤もつともと受ける質たちなれば、長吉と喧嘩してこれこれの乱暴に逢あひましたと訴へればと

て、それはどうも仕方が無い大屋さんの息子さんでは無いか、此  
 方つちに理が有らうが先方さきが悪るからうが喧嘩の相手に成るといふ事  
 は無い、謝罪わびて来い謝罪て来い途方も無い奴だと我子を叱りつけ  
 て、長吉がもとへあやまりに遣られる事 必ひつちやう定なれば、三五郎  
 は口惜くやしさを噛かみつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場処なほ  
 愈なほると共にそのうらめしさも何時いつしか忘れて、頭かしらの家の赤ん坊が  
 守りをして二銭が駄賃をうれしがり、ねんねんよ、おころりよ、  
 と背負しよひあるくさま、年はと問へば生意気ざかりの十六にも成り  
 ながらその大躰づうたいを耻かしげにもなく、表町へものこのこと出か  
 けるに、何時も美登利と正太が鬨なぶりものに成つて、お前は性根しやうね  
 を何処へ置いて来たとからかはれながらも遊びの中間は外れざり



き。

春は桜の賑にぎわひよりかけて、なき玉菊が燈籠とうろうの頃、つづいて秋の新仁和賀しんにわかには十分間に車の飛ぶ事この通りのみにて七十五輛りようと数へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉あかとんぼ田圃たんぼに乱るれば横堀うづらに鶉うづらなく頃も近づきぬ、朝夕あさゆふの秋風身にしみ渡りて上じやう清せいが店の蚊遣香かやりこう懐炉くわいろ灰ばいに座をゆづり、石橋の田村やが粉挽こなひく臼うすの音さびしく、角海老かどゑびが時計の響きもそぞろ哀れの音ねを伝へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里につぼりの火の光りもあれが人を焼く烟けぶりかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かかるやうな三味の音ねを仰いで聞けば、仲之町なかのてう芸者が冴さえたる腕うでに、君が情の仮寐かりねの床にと何ならぬ一ふし哀れも深く、この時節より通

ひ初そむるは浮かれ浮かるる遊ゆふかく客かくならで、身にしみじみと実のある  
 お方のよし、遊つとめ女あがりの去る女ひとが申まをき、このほどの事かかんも  
 くだくだしや大音寺前めづにて珍めづらしき事は盲めくら目あんま按摩まの二十ばかりな  
 る娘、かなはぬ恋に不自由なる身を恨みづみて水みづの谷やの池いけに入い水すいし  
 たるを新らしい事とて伝へる位なもの、八百屋の吉きち五郎ごろうに大工だい  
 の太吉たけきちがさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふにこの一件で  
 あげられましたと、顔の真まんなか中なかへ指をさして、何の子細なく取立  
 てて噂うはさをする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供こどもの三五人手を  
 引つれて開ひらいた開ひらいた何の花はなひらいたと、無心の遊あそびも自  
 然と静しずかにて、廓くわくに通とほる車くるまの音ねのみ何時いつにいつ変からず勇ゆうましく聞きえぬ。  
 秋あき雨さめしとしと降ふるかと思おもへばさつと音ねして運こびくる様ようなる

淋しき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵の  
ほどより表の戸をたてて、中に集まりしは例の美登利に正太郎、  
その外には小さき子供の二三人寄りて細螺きしやごはじきの幼なげな事  
して遊ぶほどに、美登利ふと耳を立てて、あれ誰れか買物に來た  
のでは無いどぶいたか溝板を踏む足音がするといへば、おやさうか、己  
いらは少つちとも聞かなかつたと正太もちうちうたこかいの手を止  
めて、誰れか中間なかまが來たのでは無いかと嬉うれしがるに、門かどなる人は  
この店の前まで來たりける足音の聞えしばかりそれよりはふつと  
絶えて、音も沙汰さたもなし。

正太は潜くぐりを明けて、ばあと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぽつぽつと行く後影、誰だれだ誰れだ、おいお這入はいりよと声をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭いとはず駆け出いださんとせしが、ああ彼奴あいつだと一ト言、振かへつて、美登利さん呼んだつても来はしないよ、一件つむりだもの、と自分の頭を丸まるめて見せぬ。

信のぶさんかへ、と受けて、嫌やな坊主つたら無い、きつと筆か何か買ひに来たのだけれど、私たちが居るものだから立聞きをして帰つたのであらう、意地悪るの、根性まがりの、ひねっこびれの、どんも吃りの、はッ齒かけの、嫌やな奴め、這入つて来たら散々と窘いぢぢめてや

る物を、帰つたは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸ちよと見てやる、とて正太に代つて顔を出せば軒の雨だれ前髪に落ちて、おお気味が悪ると首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈がすとうの下を大黒傘肩にして少しうつむいてゐるらしくとぼとぼと歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも見送るに、美登利さんどうしたの、と正太は怪しがりて背中をつつきぬ。

どうもしない、と気の無い返事をして、上へあがつて細螺きしやごを数へながら、本当に嫌やな小僧とつては無い、表向きに威張つた喧嘩は出来もしないで、温順をとこなしさうな顔ばかりして、根性がくすくすしてゐるのだもの憎くらしからうでは無いか、家の母かかさんが言ふてゐたつけ、瓦落がらがら々々してゐる者は心が好いのだと、それだ

からくすくすしている信さん何かは心が悪るいに相違ない、ねへ  
正太さんさうであらう、と口を極めて信如の事を悪く言へば、そ  
れでも龍華寺はまだ物が解つてゐるよ、長吉と来たらあれははや  
と、生意気に大人の口を真似れば、お廃よしよ正太さん、子供の癖  
にませた様でをかしい、お前は余つほどひやうきん 剽ひやうきん 軽ひやうきん ものだね、とて  
美登利は正太の頬ほをつついて、その真面目がほはと笑ひこけるに、  
己おらだつても最少もすこし経ては大人になるのだ、蒲田屋かばたやの旦那のやう  
に角袖かくそで外套くわいとうか何か着てね、祖母おばあさんがしまつて置く金時計を  
貰もらつて、そして指輪もこしらへて、巻烟草まきたばこを吸つて、履く物は  
何が宜よからうな、己おらは下駄せつたより雪駄せつたが好きだから、三枚裏にし  
て襦しゅ袢たんの鼻緒しゆちんといふのを履くよ、似合ふだらうかと言へば、美

登利はくすくす笑ひながら、背せいの低い人が角袖外套に雪駄せいでばき、まあどんなにか可笑をかしからう、目薬の瓶びんが歩くやうであらうと誹をすに、馬鹿を言つていらあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、こんな小ちいつぽけでは居ないと威張るに、それではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠ねずみがあれ御覧、と指をさすに、筆やの女房つまを始めとして座にある者みな笑ひころげぬ。

正太は一人真面目に成りて、例の目の玉ぐるぐるとさせながら、美登利さんは冗談にしてゐるのだね、誰れだつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故なぜをかしからう、奇麗な嫁さんを貰つて連れて歩くやうに成るのだがなあ、己らは何でも奇麗のが好きだから、煎餅せんべいやお福のやうな痘痕みつちやづらや、薪まきやお出額でこの

やうなが万もし一來ようなら、直じきさま追出して家へは入れて遣やらないや、己あぼたらは痘痕あぼたと湿しつつかきは嫌あぼたひと力あぼたを入れるに、主人あるじの女は吹出して、それでも正さん宜く私が店へ来て下さるの、伯母さんの痘痕あぼたは見えぬかえと笑ふに、それでもお前は年寄りだもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りはどうでも宜いとあるに、それは大失敗おほしくじりだねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、それよりも、それよりもずんと好いはお前の隣に据つてお出いでなさるのなれど、正太さんはまあ誰れにしようきよもとと極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清きよもと元か、まあどれをえ、と問はれて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何処どこが好い者



かと釣りらんぷの下を少し居退きて、壁際かべぎわの方へと尻込みしりごみをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と凶星をさされて、そんな事を知る物か、何だそんな事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたたきながら、廻れ廻れ水みづづぐるま車くるまを小音おんに唱うたひ出す、美登利は衆人おほくの細螺を集めて、さあもう一度はじめからと、これは顔をも赤らめざりき。

## 十一

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事は濟めども言はば近道の土手どてまへ々前に、仮初かりそめの格子門かうしもん、のぞけば鞍馬くらまの石燈籠いしどうろに萩はぎ

の袖垣そでがきしをらしう見えて、椽ゑん先にき巻きたる簾すだれのさまもなつか  
 しう、中がらすの障子のうちには今いま様のやう按察あぜちの後こう室しつが珠数じゆずを  
 つまぐつて、冠かぶつ切りの若わかも立たち出るいづやと思はるる、その  
 一ト搆かまへが大黒屋の寮なり。

昨日きのふも今日けふも時雨しぐれの空に、田町の姉より頼みの長胴着が出来た  
 れば、暫時すこしも早う重ねさせたき親心、御苦勞でも学校まへの一寸  
 の間まに持つて行つてくれまいか、定めて花も待つてゐるようほかに、  
 と母親よりの言ひつけを、何も嫌やとは言ひ切られぬ温順おとなしさに、  
 唯ただはいはいと小包みを抱へて、鼠小倉ねづみくらの緒のすがりし朴木齒ほうのきば  
 の下駄したひたひたと、信如は雨傘さしかざして出ぬ。

お齒ぐる溝とどぶの角より曲りて、いつも行くゆなる細道をたどれば、

運わるう大黒やの前まで来し時、さつと吹く風大黒傘の上を掴つかみて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈はげしく吹けば、これは成らぬと力足を踏こたゆる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずるずると抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇ひさしに厭いとふて鼻緒をつくるふに、常々仕馴しなれぬお坊さまの、これは如何いかな事、心ばかりは急あせれども、何としても甘うまくはすげる事の成らぬ口惜くやしさ、ぢれて、ぢれて、袂たもとの中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、ずんずんと裂きて紙縷こよりをよるに、意地わるの嵐またもや落し来て、立かけし傘のころころと転ころがり出いづるを、いまましい奴めと腹立たしげ

にいひて、取止めんと手を延ばすに、膝ひざへ乗せて置きし小包み意い久地くぢもなく落ちて、風呂敷は泥に、我わが着る物の袂までを汚しぬ。

見るに氣の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子がらすごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母かかさん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の引出しから友仙ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍もどかしきやうに、馳はせ出でて椽先の洋かうも傘りさすより早く、庭石の上を伝ふて急ぎ足に來たりぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、どのやうの大事にでも逢あひしやうに、胸むねの動悸どうきの早くうつを、人の見るかと背後うしろの見られて、恐る恐る門の傍そばへ寄れば、信如もふつと振返りて、これ

も無言に脇わきを流るる冷汗、跣足はだしに成りて逃げ出したき思ひなり。

平常つねの美登利ならば信如が難義ていの体を指さして、あれあれあの意久地なしと笑ふて笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいままの悪にくまれ口、よくもお祭りの夜よは正太さんに仇あだをするとして私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちやんを擲たかせて、お前は高見さいはいで采配さいはいを振つてお出いでなされたの、さあ謝罪あやまりなさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指図、女郎でも宜いいでは無いか、塵ちり一本お前さんが世話には成らぬ、私には父ととさんもあり母かかさんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥なまぐさのお世話には能ようならぬほどに、余計な女郎呼よばはり置いて貰もらひましよ、言ふ事があらば陰のくすくすならで此処ここでお言ひな

され、お相手には何時いつでも成つて見せます、さあ何とで御座んす、と袂とを捉らへて捲まくしかくる勢ひ、さこそは当り難うもあるべきを、物いはず格子のかけに小隠れて、さりとして立去るでも無しに唯うぢうぢと胸とどろかすは平常つねの美登利のさまにては無かりき。

## 十三

此処は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直ひたあゆみに為せしなれども、生あや憎にくの雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏切りて、詮せんなき門もん下したに紙こ縷よりを縷よる心地、憂うき事さま

ざまにどうも堪たへられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背より冷ひやみ  
 水づをかけられるが如ごとく、顧みねどもその人と思ふに、わなわな  
 と慄ふるへて顔の色も変わるべく、後向きに成りて猶なほも鼻緒に心を尽す  
 と見せながら、半なかばは夢中にこの下駄いつまで懸りても履ける様に  
 は成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、急急不器用なあんな手つきして  
 どうなる物ぞ、紙縷は婆々ばばより縷わら、藁しべなんぞ前まへ壺つぼに抱かせたと  
 て長もちのする事では無い、それぞれ羽織の裾すそが地について泥に  
 成るは御存じ無いか、あれ傘が転がる、あれを畳んで立てかけて  
 置けば好よいと一々鈍もどかしう齒がゆくは思へども、此処に裂きれが  
 御座んす、此裂これでおすげなされと呼かくる事もせず、これも立尽

して降雨袖に侘しきを、厭いとひもあへず小隠れて覗うかがひしが、さりと  
 も知らぬ母の親はるかに声を懸けて、火のしの火が熾おこりましたぞ  
 え、この美登利さんは何を遊んでゐる、雨の降るに表へ出たの悪い  
 戯たづは成りませぬ、又この間のやうに風引かうぞと呼立てられる  
 に、はい今行ゆますと大きく言ひて、その声信如に聞えしを耻はづかし  
 く、胸はわくわくと上氣して、どうでも明けられぬ門きわの際きわにさり  
 とも見過しがたき難義をさまさまの思案尽して、格子の間より手  
 に持つ裂れを物いはず投げ出いせば、見ぬやうに見て知らず顔を信  
 如のつくるに、ゑゑ例いづもの通りもの心根と遣やる瀬やなき思おもひを眼に集め  
 て、少し涙の恨み顔、何を憎んでそのやうに無つ情れなきそぶりは見せ  
 らるる、言ひたい事は此方こなたにあるを、余りな人とこみ上あるほど思



ひに迫れど、母親の呼声しばしばなるを侘しく、詮せん方かたなきに一  
 ト足二タ足ゑゑ何ぞいの未練くさい、思はく耻かしと身をかへし  
 て、かたかたと飛石を伝ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば  
 紅べにい入り友仙の雨にぬれて紅葉もみぢの形かたのうるはしきが我が足ちかく散ちり  
 ぼひたる、そぞろに床ゆかしき思ひは有れども、手に取あぐる事をも  
 せず空むなしう眺めて憂き思ひあり。

我が不器用をあきらめて、羽織ひもの紐ひもの長きをはづし、結ゆわひつけ  
 にくるくると見とむなき間に合せをして、これならばと踏ふみ試こころむ  
 るに、歩あきにくき事言ふばかりなく、この下駄で田町まで行く事  
 かと今さら難義は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横に  
 二タ足ばかりこの門をはなるるにも、友仙の紅葉目に残りて、捨

てて過ぐるにしのび難く心残りして見返れば、信さんどうした鼻緒を切つたのか、その姿はなりどうだ、見ツとも無いなど不意に声を懸くる者のあり。

驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廓内なかよりの歸りと覺しく、裕衣ゆかたを重ねし唐とうざん棧の着物に柿色の三尺を例いづもの通り腰の先にして、黒八の襟えりのかかつた新らしい半天、印の傘をさしかざし高足たかあし駄の爪つま皮かわも今朝けさよりとはしるき漆の色、きわぎわしう見えて誇らし気なり。

僕は鼻緒を切つてしまつてどうし為ようかと思つてゐる、本当に弱つてゐるのだ、と信如の意久地なき事を言へば、そうだらうお前に鼻緒たちの立ツこは無い、好いや己おれの下駄はいを履ゆきて行ねへ、この

鼻緒は大丈夫だよといふに、それでもお前が困るだらう。何己れ  
 は馴れた物だ、かうやつてかうすると言ひながら急遽あわただしう七分  
 三分に尻端折しりはしをりて、そんな結ゆわひつけなんぞよりこれが爽快さつぱりだと  
 下駄を脱ぐに、お前跣足はだしに成るのかそれでは気の毒だと信如困り  
 切るに、好いよ、己れは馴れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔ら  
 かいから跣足で石ごろ道は歩けない、さあこれを履いてお出で、  
 と揃そろへて出す親切いだしさ、人には疫病やくび神ようがみのやうに厭いとはれながらも  
 毛虫眉毛まゆげを動かして優ことばしき詞いづのもれ出るぞをかしき。信さんの下  
 駄は己れが提だいげて行かう、台だい処とこへ抛ほり込んで置たら子細はある  
 まい、さあ履き替へてそれをお出しと世話をやき、鼻緒の切れし  
 を片手に提いげて、それなら信さん行てお出いで、後刻のちに学校で逢はう

ぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家の方へと行別れるに思ひの止まるとど紅入べにいりの友仙は可憐いぢらしき姿を空しく格子門の外にと止めぬ。

## 十四

この年三の酉とりまで有りて中なか一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑にぎわひすさまじく、此処ここをかこつけに検査場けんさばの門より乱れ入る若わかうど人達の勢ひとは、天柱ちいくだけ地維いかくるかと思はるる笑ひ声のどよめき、中なか之町のてうの通りは俄にわかに方角の替りしやうに思はれて、角町すみてう 京町きようまち 処ところ々ところのはね橋より、さつさ押せ押

せと猪牙ちよぎがかつた言葉に人波を分くる群もあり、河岸かしの小店こみせの百も  
もさん轉まづりより、優やさにうづ高たかき大おほまがき籬かきの楼上ろうじやうまで、絃歌げんかの声こゑのさ  
 まざまに沸わき来るやうな面白おもしろさは大方おほまがきの人ひとおもひ出ででて忘れぬ物  
おほに思おもすも有あるべし。正太せいはこの日ひ日ひがけの集あつめを休やすませ貰もらひて、  
 三五郎さんごろうが大おほがしら頭あたまの店みせを見舞みまふやら、団子屋だんごやの背せい高たかが愛想あいそげ氣けの  
 ない汁粉じゆやを音おとづれて、どうだ儲まうけがあるかえと言いへば、正せいさん  
 お前おまへ好このい処ところへ来た、我おれが餡あんこの種あなしに成なつてもう今いまからは何  
 を売うらう、直す様さま煮なかけては置おいたけれど中なか途たぎお客おきやくは断ことれない、  
 どうしような、と相談あひだを懸かけられて、智恵ちゑ無なしの奴やつめ大おほなべ鍋なべの四よ  
るり辺へにそれそれツ位くらい無な駄だがついてゐるでは無ないか、それへ湯ゆを廻まわして砂  
 糖とうさへ甘あまくすれば十人前じゆにんまへや二十人にじゆにんは浮ういて来きよう、何処どこでも皆みなな

そうするのだお前の店とこばかりではない、何この騒ぎの中で好よし悪あしを言ふ物が有らうか、お売りお売りと言ひながら先に立つて砂糖の壺を引寄すれば、目ツかちの母親おどろいた顔をして、お前さんは本当に商あきんど人ひとに出来てゐなさる、恐ろしい智者者だと賞めるに、何だこんな事が智者者な物か、今横町の潮吹きとこの処とこで餡が足りないツてこうやつたを見て来たので己れの発明では無い、と言ひ捨てて、お前は知らないか美登利さんの居る処を、己れは今朝から探してゐるけれど何処どこへ行たか筆やへも来ないと言ふ、廓なか内なかだらうかなと問へば、むむ美登利さんはな今の先己れいづの家の前を通つて揚屋町あげやまちの笏はねぼし橋はしから這入はいつて行た、本当に正さん大變だぜ、今日はね、髪をかういふ風にこんな嶋田しまだに結つてと、変てこ

な手つきして、奇麗だねあの娘はと鼻を拭つつ言へば、大卷さん  
 より猶なほ美しいや、だけれどあの子も華魁おいらんに成るのでは可憐かわいさうだ  
 と下を向ひて正太の答ふるに、好いじやあ無いか華魁になれば、  
 己れは来年から際物屋きわものやに成つてお金をこしらへるがね、それを  
 持つて買ひに行くのだと頓馬とんまを現はすに、洒落しやらくさい事を言つて  
 ゐらあそうすればお前はきつと振られるよ。何故なぜ何故。何故でも  
 振られる理由わけが有るのだもの、と顔を少し染めて笑ひながら、そ  
 れじやあ己れも一廻りして来ようや、又後のちに来るよと捨て台辞ぜりふし  
 て門かどに出て、十六七の頃までは蝶てふよ花よと育てられ、と怪しきふ  
 るへ声にこの頃此処はやりの流行ぶしを言つて、今では勤めが身にしみ  
 てと口の内にくり返し、例の雪駄せつたの音たかく浮きたつ人の中に交

りて小さき身体からだは忽たちまちに隠れつ。

揉もまれて出し廓いでくるわの角、向ふより番頭ばんとう新造しんぞのお妻つまと連れ立ちて

話しながら来るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども

誠に頓馬の言ひつる如く、初ういうい々しき大嶋田結ひ綿のやうに絞り

ばなしふさふさとかけて、鼈べつかう甲かのさし込、総ふさつきの花かんざし

ひらめかし、何時よりは極ごくさいしき彩色のただ京人形を見るやうに思は

れて、正太はあつとも言はず立止まりしまいつもま例の如くは抱きつき

もせで打守るに、彼方こなたは正太さんかとして走り寄り、お妻どんお前

買ひ物が有らばもう此処でお別れにしましよ、私はこの人と一処

に帰ります、左様ならとて頭かしらを下げるに、あれ美いちやんの現金

な、もうお送りは入りませぬとかえ、そんなら私は京町で買物し



ましよ、とちよこちよこ走りに長屋の細道へ駆け込むに、正太はじめて美登利の袖そでを引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝けさかへ昨日かへ何故はやく見せてはくれなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打しほれて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭いやでしようが無い、とさし俯うつむ向きむきて往来ゆききを耻はぢぬ。

## 十五

憂うく耻はかしく、つつましき事身ことみにあれば人の褒あめるは嘲あざけりと聞きなされて、嶋田しまだの鬚まげのなつかしさに振むかへり見る人ひとたちをば我われれを蔑さげすむ眼まなこつきと察とられて、正太せいさん私わたしは自宅うちへ帰かへると言いふに、

何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大卷さんと喧嘩けんくわでもしたのでは無いか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顔の赤むばかり、連れ立ちて団子屋の前を過ぎるに頓馬は店より声をかけてお中が宜よろしう御座いますと仰山な言葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太さん一処に来ては嫌やだよと、置きざりに一人足を早めぬ。

お酉さまへ諸もろとも共にと言ひしを道引ひきたが違へて我が家やの方かたへと美登利の急ぐに、お前一処には来てくれないのか、何故其方そつちへ歸つてしまふ、余あんまりだぜと例の如く甘へてかかるを振切るやうに物言はず行ゆけば、何の故ゆゑとも知らねども正太は呆あきれて追おひすがり袖とどを止とどめては怪しがるに、美登利顔のみ打赤めて、何でも無い、と言

ふ声理由あり。

寮の門をばくぐり入るに正太かねても遊びに来馴れてさのみ遠慮の家にもあらねば、跡より続いて椽ゑんさき先からそつと上るを、母親見るより、おお正太さん宜く来て下さつた、今朝から美登利の機嫌が悪くて皆なあぐねて困つてゐます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしい惶かしこまりて加減が悪るのですかと真面目に問ふを、いいゑ、と母親怪しき笑顔をして少し経てば愈なほりませう、いつでも極りの我まま様さん、さぞお友達とも喧嘩しませうな、真実ほんにやり切れぬ嬢さまではあるとて見かへるに、美登利はいつか小座敷に蒲団抱ふとんかいまき巻持出でて、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥ふして物をも言はず。

正太は恐る恐る枕もとへ寄つて、美登利さんどうしたの病氣なのか心持が悪いのか全体どうしたの、とさのみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを悩ますに、美登利は更に答へも無く押ゆる袖にしねのび音の涙、まだ結びこめぬ前髪の毛の濡ぬれて見ゆるも子細ありとはしるけれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出いでず唯ただひたすらに困り入るばかり、全体何がどうしたのだらう、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何がそんなに腹が立つの、と覗のぞき込んで途方にくるれば、美登利は眼を拭ぬぐふて正太さん私は怒つてゐるのでは有りません。

それならどうしてと問はれれば憂き事さまさまこれはどうでも話しのほかの包ましきなれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言

はずして自づと頬ほほの赤うなり、さして何とは言はれねども次第次第に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思ひをまうけて物の耻たかしき言ふばかりなく、成なること事ならば薄暗き部屋のうち誰たれとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人気ままの朝夕をへ経たや、さらばこの様やうの憂き事ありとも人目つつましからずはかくまで物は思ふまじ、何時までも何時までも人形と紙雛あねさまとをあひ手にして飯ままこと事ばかりしてゐたらばさぞかし嬉しき事ならんを、ゑゑ厭や厭や、大人に成るは厭やな事、何故なぜこのやうに年をば取る、もう七月十月ななつきとつき、一年も以前もとへ帰りたいたと老としより人じみた考へをして、正太の此処にあるをも思はれず、物いひかければことごとけ悉く蹴けちらして、帰つておくれ正太さん、後生ごせうだ

から帰つておくれ、お前が居ると私は死んでしまふであらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと目がまわる、誰れも誰れも私の処へ来ては厭やなれば、お前も何卒どうぞ帰つてと例に似合ぬ愛想あいそづかし、正太は何故なにとも得ぞ解きがたく、烟のうちにあるやうにてお前はどうしても変てこだよ、そんな事を言ふ筈はずは無いに、可を怪かしい人だね、とこれはいささか口惜くちをしき思ひに、落ついて言ひながら目には気弱の涙のうかぶを、何とてそれに心を置くべき帰つておくれ、帰つておくれ、何時まで此処に居てくれればもうお友達でも何でも無い、厭やな正太さんだと憎くらしげに言はれて、それならば帰るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加減見る母親には挨拶あいさつもせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ

出しぬ。

## 十六

真一文字に駆けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば売しまふて、腹掛のかくしへ若干金かをぢやらつかせ、弟妹引つれつつ好きな物をば何でも買への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み来しなるに、やあ正さん今お前をば探してゐたのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上やうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、黙つてゐる生意気は吐くなと何時になく荒らい事を言つ

て、それどころでは無いとて鬱ふさぐに、何だ何だ喧嘩けんくわかと喰べか  
 けの餡あんぱんを懷ふところ中に捻ねぢ込んで、相手は誰れだ、龍華寺か長吉  
 か、何処で始まつた廓な内か鳥居前か、お祭りの時とは違ふぜ、不  
 意でさへ無くは負けはしない、己れが承知だ先棒は振らあ、正さ  
 ん胆きもツ玉をしつかりして懸りねへ、と競ひかかるに、ゑゑ氣の早  
 い奴め、喧嘩では無い、とてさすがに言ひかねて口を噤つぶめば、で  
 もお前が大層らしく飛込んだから己れは一途いちづに喧嘩かと思つた、  
 だけれど正さん今夜はじまらなければもうこれから喧嘩の起りッ  
 こは無ないね、長吉の野郎片腕かたうでがなくなる物と言ふに、何故どうし  
 て片腕かたうでがなくなるのだ。お前知らずか己れも唯ただ今いまうちの父とつさ  
 んが龍華寺の御新造ごしんぞと話してゐたを聞いたのだが、信さんはもう



近々何処かの坊さん学校へ這入るのだとき、衣ころもを着てしまへば手  
 が出ねへや、空からつきりあんな袖のぺらぺらした、恐ろしい長い物  
 を捲まくり上るのだからね、さうなれば来年から横町も表も残らずお  
 前の手下だよと煽そやすに、廃よしてくれ二銭貰ふと長吉の組に成るだ  
 らう、お前みたやうのが百人中間なかまに有たとて少ちつとも嬉しい事は無  
 い、着きたい方どこへ何方へでも着きねへ、己おれは人は頼まない真ほんの  
 腕うでツこで一度龍華寺とやりたかつたに、他よそ処へ行かれては仕方が  
 無い、藤本は来年学校を卒業してから行くのだと聞いたが、どう  
 してそんなに早く成つたらう、為しやう様のない野郎だと舌打しながら、  
 それは少しも心に止まらねども美登利が素振のくり返されて正太  
 は例の歌も出ず、大路の往來ゆききの夥おびただしきさへ心淋しければ賑や

かなりとも思はれず、火ともし頃より筆やが店に転がりて、今日の西とりの市目茶々に此処かしこも彼処かしこも怪しき事成りき。

美登利はかの日を始めにして生れかはりし様の身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束からやくそくはてし無く、さしもに中よし成けれど正太ときへに親しまず、いつも耻かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊かっぱつの活澆かたさは再び見るに難かたく成ける、人は怪しがりて病せいひの故かと危ぶむも有れども母親一人ほほ笑みては、今にお侠きやんの本性は現れまする、これは中休みと子細わけありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温お

順となしう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと  
 誹そしるもあり、表町は俄にはかに火の消えしやう淋しく成りて正太が美音  
 も聞く事まれに、唯夜な夜なの弓張提燈ゆみはりでうちん、あれは日かけの集  
 めとしるく土手を行く影そぞろ寒げに、折ふし供する三五郎の声  
 のみ何時に交らず滑稽おどけては聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立たちいづ出る風説うわさをも美登利は  
 絶えて聞かざりき、有し意地をばそのままに封じ込めて、此処し  
 ばらくの怪しの現象さまに我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かし  
 うのみ有けるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門かうしもんの外よりさ  
 し入れ置きし者の有けり、誰たれの仕業と知るよし無けれど、美登  
 利は何ゆゑとなく懐なつかしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋

しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに伝へ聞くその明けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日なりしとぞ。

# 青空文庫情報

底本：「にぎりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文学界」文学界雑誌社

1895（明治28）年1～3、8、11、12月、1896（明治29）年

1月

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本に  
そって修正し、組み入れました。

「たけくらべ」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※底本巻末の编者による語注は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：岡村和彦

2014年10月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# たけくらべ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>